

くすり袋を楽しむ

平成19年11月6日～12月16日にかけて、米原市柏原の柏原宿歴史館において、「くすり袋展」が開催されました。中山道の宿場であった柏原宿をはじめ伊吹山周辺のもぐさのくすり袋や、家庭でおなじみの置き薬などさまざまな種類のカラフルなくすり袋が紹介されました。

くすり袋はその名のとおり薬を入れる袋のことです、さまざまな薬を包んでいました。特に地元米原には薬草の宝庫と伝えられる近江の秀峰伊吹山があり、そこに自生するオオヨモギ（大蓬）が“もぐさ（艾）”の原料となることから、伊吹山の麓にある柏原宿の名物として、多くの旅人が“もぐさ（艾）”を買い求めたといいます。

江戸時代、薬袋はほとんどが黒一色の版木で刷っていました。一枚の和紙に效能などを刷り、その面を内側に畳み込んで、表に薬名や店の名前を刷り込んだ包紙状のものでした。その後は、カラフルな色彩となり、形も袋状へと変化していきました。また、図柄については熊胆が処方されたりくすり袋には

熊が描かれているように、一目で何のくすりかわかるようなものになっています。例えば、虫下しのくすり—寄生虫、風邪薬—達磨、子ども薬—幼児、婦人薬—女性などがあります。

また、携帯用のくすり袋だけでなく、富山や日野の薬売りが各家庭を訪れ薬を置く「置き薬」（配置売薬）なども人々に親しまれ、くすりを入れた箱に色々な薬のラベルが貼ってあり、当時の薬の状況がわかります。そしてなにより、紙風船などのお土産は子どもたちの胸をはずませ、薬屋さんが待ち遠しいものでした。

（桂田峰男）



▲くすり袋

情報 BOX

◆米原市教育委員会では、下記の書籍を刊行しました。

『戦国の山城・近江鎌刃城』（定価1365円）

※調査成果および、講演会の記録集です。県内の書店でご購入ください。サンライズ出版

『生き物調査（植物・鳥類）報告書 米原市山東地域』

※貴重な植物群落や多種多様な鳥類を確認しました。A3版62ページ。頒布価格1000円

◆米原市教育委員会では、市内の指定文化財を紹介したパンフレットを作成しました。

『米原市の文化財 一歴史・文化の交差点まいばらー』

※希望者に無料配布しています（送料別）。米原市の指定文化財は133件、登録文化財4件です。

◆米原市教育委員会では、平成19年度におこなった国史跡弥高寺跡発掘調査現地説明会資料を作成しました。希望の方は、お問合せください。

◆米原市柏原宿歴史館では、下記の企画展図録を刊行しました。

『ある日 ある時 写真展』（頒布価格300円）

※中山道柏原宿の明治・大正・昭和を写真でつづる。

○問合せ先 柏原宿歴史館 0749-57-8020

◆米原市伊吹山文化資料館では、平成18年度の活動を記録した下記の書籍を刊行しました。

『伊吹山文化資料館年報9』（頒布価格200円）

※過去の企画展や歴史講座を振り返っています。

企画展図録『太古の海の記憶—2億7千年前のサンゴ礁から—』（頒布価格200円）

※美濃帶石灰岩地に産出する化石を紹介しています。
○問合せ先 伊吹山文化資料館 0749-58-0252

◆◆編集後記◆◆

市内の資料館施設が今年度4月からすべて指定管理となりました■すべての公共施設を速やかに移行するのが市の方針のようです■街道・交流のまち米原を担う、中山道の「柏原宿歴史館」は地元柏原区■同じく、「醒井宿資料館」は醒井区が管理者としてスタートしました■市のシンボル伊吹山をアピールする「伊吹山文化資料館」■ここは体育館・グラウンド・プールやホール・公民館、おまけに薬草の湯もついて伊吹地域の財團が管理者■合併を機にひとつになりかけた資料館施設が再び別々の道を歩みはじめました■でも、文化財担当者との連携は必要不可欠です■どれも弱小資料館ですが、現状やその後を見学に、ぜひ足をお運びください（山ノ神）

米原市文化財ニュース
佐 加 太 第26号

発行 平成19年12月7日

編集 米原市教育委員会

〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地

米原市教育委員会まなび推進課

TEL.0749(55)8106

印 刷 (株)シバタプロセス印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

山岳寺院の僧坊跡を検出 一弥高寺跡発掘調査（2次）速報一

この夏、伊吹山中腹にある山岳寺院「弥高寺跡」で将来の史跡整備と活用のための基礎資料を得ることを目的とした発掘調査をおこないました。今回は、昨年に続く2回目の調査で、寺に仕える僧侶が修行し、住まいしたと思われる僧坊跡を発掘しました。

弥高寺跡は、平成16年に国の史跡に指定された「京極氏遺跡 一京極氏城館跡・弥高寺跡」（米原市弥高・上平寺・藤川）を構成する重要な遺跡です。

京極氏遺跡は、永正2年（1505）の日光寺の講和で一族の内紛を納めた京極高清が、守護大名として北近江を支配するために整備しました。史跡は伊吹山南麓に展開し、日常の住まいである京極氏館跡と家臣屋敷跡、戦際に使用した山腹の上平寺城跡、京極氏が山城として利用した弥高寺跡を指します。京極氏のお城があった期間は、家臣団のクーデタで落城した大永3年（1523）までですが、弥高寺跡については、奈良時代以降、永く伊吹山山岳信仰の中心寺院としての歴史があります。

調査の結果、三間×六間の庫裏と仏堂を兼ね備えた礎石建物（塔頭）を確認しました。庫裏では火床（囲炉裏）跡を検出しました。火床は、『石山寺縁起』などの古い絵巻に描かれていますが、山岳寺院から見つかったのは初めての事例です。また、坊跡入口付近にもなんらかの建物があつたようです。

坊院と参道を区画する土壘の下部は石垣になつておらず、石の積み方などから15世紀中ごろから後半に造られた全国的にも古い遺構だと考えられます。大門跡から本堂へまっすぐ伸びる参道は、往時、両側が石垣で築かれた重厚なものだったようです。

僧侶が使っていた道具もたくさん見つかっています。土師皿や貯蔵用の甕などが多くを占めますが、貴重な輸入品の青磁の碗や、香炉・花瓶などの仏具もあります。鎧杖か槍の石突、仏像の宝冠も出土しました。高地の寒いところなので火鉢も見られます。古銭や釘も多く、その年代は、15～16世紀前半が中心です。

第26号

2007年12月7日

滋賀県米原市教育委員会

調査地の東北隅からは、石の下に約20枚のお金を埋めた遺構を確認しました。これは、建物などを整えるにあたって、鬼門にあたる敷地の東北端で地の神を鎮めるための祀りをおこなった跡だと考えられます。

ちょっと、当時の様子をのぞいてみましょう。石積みの土塁から入ると、待機したり、着替えたりする妻入りの建物がありました。その前に広場があり、西側正面に奥行きの長い仏堂がありました。お堂に入ると、暖房や明り取りのための火床が設けられています。奥には本尊を安置した仏間がありました。奥には本尊を安置した仏間がありました。

建物の西側眼下には広大な琵琶湖が広がっています。この建物は、これを「西方淨土」として意識して建てられたものと思われます。朝日に輝き、夕日がしずむ琵琶湖を眺めながら、毎日の勤行に励み、参拝者を迎える。そんな僧侶の生活の一端がうかがえる貴重な調査になりました。

（高橋順之）



▲石垣出土状況



▲調査地全景（右奥が僧坊跡）

米原市のまつり ⑥

オコナイ

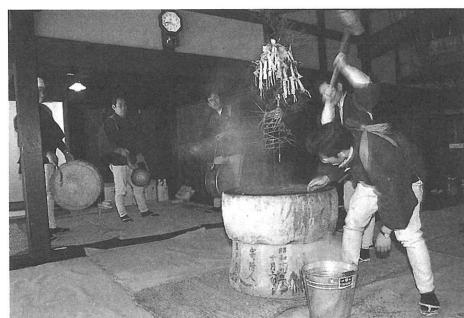
雪深い山麓に春の訪れを知らせてくれる神事「オコナイ」は、毎年1月から2月にかけて市内の多くの地区で行われます。もともと春を迎えるまつり、その年の豊作と村々の無事を神に祈る祈年祭・祝行事です。オコナイは、近畿地方を中心に中部地方・中国地方にまで分布しています。その中でも、湖北地方が中心と思われるほどたくさん行われています。

「オコナイ」は、神事、神まつり、華の頭（花の当）、また親しみを込めてオコナイさんなどと呼ばれ、鏡餅・餅花（まゆ玉）・造花が作られ、神仏に供えすることが行事の中心です。

米原市内には、特徴のあるさまざまな「オコナイ」が行われます。伊吹地区伊吹のオコナイの特徴は餅花です。ケヤキの一の股とされ、3メートル以内にそろえて、各当家一本ずつ五本調達します。大型のみごとな餅花が札の辻の灯籠前に集まり、ここから奉納の行列が伊夫岐神社へ出発します。甲津原では、

青年会があつたころ、餅をつきおわると「臼ころがし」がおこなわれました。餅つきがおわると屋敷から臼を転がり出し低いところに落とします。これを、入りたての子どもたちが押し上げるのですが、特別に大きな臼なので、今の中学生のような子らでは上げられません。そこで青年会の幹事に頼んで押し上げてもらつたそうです。山東地区志賀谷では厳格な一年神主（禰宜）をはじめとする各種の古い様式をよく残しています。河内ではまゆ玉（マエダンボ）のほか、根菜類で鶴亀や男女の陰陽物をかたどったものが板に貼り付けられます。

（桂田峰男）



▲甲津原のオコナイ

庭園に伴う礎石建物跡を検出 一京極氏館跡発掘調査(2次)速報一

平成19年春、京極氏館跡（米原市上平寺）で、保存活用のための基礎資料を得ることを目的に発掘調査をおこないました。

江戸時代初期に描かれた『上平寺城絵図』（米原市蔵）から、今回の調査地が絵図の「御屋形」の北東部分にあたり、調査区のすぐ北には、全国的にも類例の少ない戦国期の武家庭園が広がります。

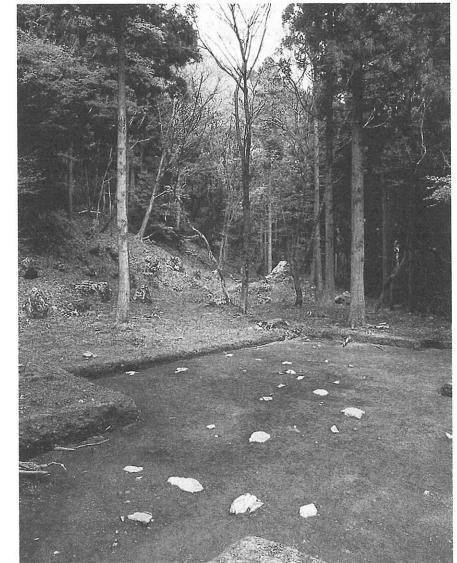
発掘調査の結果、地表面から約30~50cm下で当時の生活面を確認しました。調査区の北端を除くほぼ全面で、直径20~50cmの礎石を25点検出し、礎石の配列から東柱が良好に残る縁のまわる建物と、これと並行する小規模な建物の2棟があったことを確認しました。庭園に隣接することから、これを観賞し、儀式をおこなうための建物だったと考えられます。

礎石の脇からは、土師皿（かわらけ）がまとまって出土しました。

当時の大名が、その地位を守るために最も重要なのが「権威」です。当時の社会で最も高い権威は足利将軍でした。京極氏は、上平寺の居館に将軍邸を模した庭園を設け、多くの客人をもてなすハレの宴などの儀礼をおこなっていました。京都風の文化を見せることで、自らの権力を将軍権力と重ね写してみせたのです。

このような場で使用されたのが「かわらけ」です。それ自体は安いものですが、実は一度使うと汚れてしまう清浄の象徴でした。かわらけが大量に出土する場所は、非日常的なハレの儀式が頻繁におこなわれていた特別な空間だったということができます。

（高橋順之）



▲礎石建物跡（奥が庭園）

米原市の城跡探訪

米原市内には約125ヶ所もの城跡があります。それらはすべて戦国時代に築かれたものです。上平寺城跡や鎌刃城跡は、国史跡に指定されていて誌上で何度か取り上げたことがあります。今回は、山城と平地居館を1ヶ所づつ紹介します。

長比城跡（柏原・長久寺）

長比城は、近江の秀峰伊吹山より派生する滋賀県と岐阜県にまたがる野瀬山の山頂に位置しています。この地は江南の佐々木六角氏と、江北の京極氏、さらに浅井氏の境に加えて、東側で美濃国（岐阜県）と接する国境地帯でもあつたため、「境目の城」「国境の城」といった国境警備の山城が多く構えられました。長比城もその一つです。

長比城が「境目の城」「国境の城」として明確になっていくのが、浅井長政による織田信長への離反です。元亀元年（1570）4月、越前の朝倉義景を討伐していた織田信長に対して、信長の妹お市の方の婿である浅井長政が反旗をひるがえし、信長を攻撃したのです。

九死に一生を得た信長は軍勢を整え、元亀元年6月浅井長政の討伐に向かいます。これに対して、浅井・朝倉軍は、美濃の国境に防御ラインを設けます。『信長公記』（元亀元年六月条）には、「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」

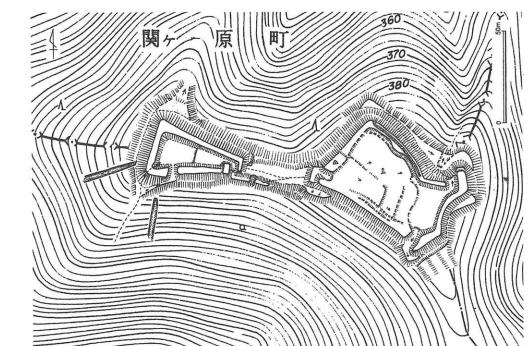
とあります。信長の侵攻に対して、越前衆の力を借りて、長比城・刈安城（上平寺城）を築城したのです。しかし、守備していた堀秀村・樋口直房は信長軍に内応し、浅井・朝倉両氏との思いとは裏腹に、両城はあっけなく落城します。

箕浦城跡（新庄・箕浦）

米原市近江地域には、昨年大河ドラマで一躍脚光を浴びた山内一豊の妻の出身である若宮氏館跡が飯村集落の中に構えられていました。このように村落内に方形に居館を構える構造が近江地域の特徴としてとらえられます。そうしたなかできわめて大規模に構えられていたのが箕浦城です。天野川北岸に井戸村屋敷、奥屋敷、新庄城が横一列に並んで構えられていました。今井氏は、京極氏の根本被官で、大字新庄内にある小字殿城とその南に隣接する小字的場付近に居館を構えていたようです。現在も水田の中に方形の微高地が残されており、これが今井氏の居館と考えられます。殿城西側は通称奥屋敷と呼ばれ、ここが井戸村の屋敷であったと伝えられています。井戸村は数多くの中世文書を伝えており、そのなかに箕浦庄内に八日市場のあったことが記されています。この地が地方商業の中心として市の開かれる場所であったことを示しています。また市場に

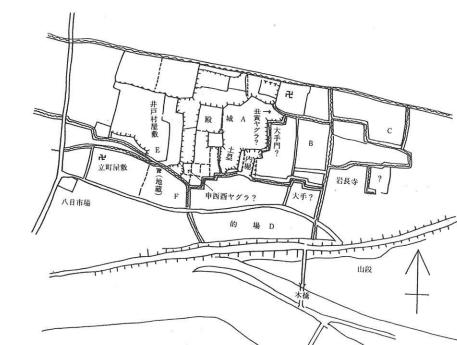
長比城は、現在でもその姿をよく留めています。JR柏原駅から中山道を東に向かい、神明神社の鳥居の奥、「長比城」の木札より尾根伝い（踏み跡）に登ると、山頂の西側の曲輪に到着します。

長比城の遺構は、大きく東と西の曲輪（郭）から成り立っています。西側の曲輪は、東西約50m、南北最長で約30mで、ぶ厚く高い土塁が巡り、東側にくい違いの虎口を設け防御しています。東の曲輪は、西の曲輪よりひと回り大きく、とくに東側の土塁はぶ厚く高くなっています。東側と北側にくい違いの虎口を設けており、東側（美濃側）を意識した構造となっています。（桂田峰男）



▲長比城跡縄張図

地蔵堂のあったことが知られていますが、現在の箕浦集落の中心にある八幡神社の地蔵堂がこれに相当するものと考えられます。城跡の面影は残していませんが、市跡や地蔵堂などに中世を感じることができます。（中井 均）



▲箕浦城跡略測図